

# ブラームス: 2つのクラリネットソナタ 作品120

Johannes Brahms:

Zwei Sonaten für Klarinette und Klavier

op.120

H. S.

2017.06.19-

# 目次

第 1 章	作曲に関する経緯	3
1.1	背景と作曲過程 . . . . .	3
1.2	初演 . . . . .	3
1.3	出版 . . . . .	4
第 2 章	クラリネットソナタ第 1 番	5
2.1	全体の構造 . . . . .	5
2.2	第 1 楽章 . . . . .	5
2.3	第 2 楽章 . . . . .	5
2.4	第 3 楽章 . . . . .	5
2.5	第 4 楽章 . . . . .	5
第 3 章	クラリネットソナタ第 2 番	6
3.1	第 1 楽章: Allegro amabile . . . . .	6
3.2	第 2 楽章 . . . . .	7
3.3	第 3 楽章 . . . . .	7
参考文献		8

## 第1章

# 作曲に関する経緯

### 1.1 背景と作曲過程

Brahms が晩年の室内楽分野における傑作、クラリネット三重奏曲とクラリネット五重奏曲を作曲したのは1891年で、これはマイニンゲン宮廷管弦楽団の首席クラリネット奏者 Richard Mühlfeld の演奏に触発されたものであることは広く知られている。その後 Brahms はピアノのための小品 (作品 116 から 119) に重点を移しているが、クラリネットとピアノのための作品というアイディアは持っていたことが Ferdinand Schumann の回想で伝わっている [1]。このアイディアが実現するのは1894年、Brahms はイシュル滞在中の7月から8月にかけて2曲のクラリネットソナタを平行して作曲している [2][4]。ただし第1番第1楽章、第3楽章のスケッチがイシュルへ移動する前に残されている [1][4]。このふたつのソナタは1891年の作品とは異なりB管クラリネットのために書かれている。

この時期の Brahms の周辺は栄光と親しい友人との死別で彩られている。1892年には Elisabeth von Herzogenberg が1月7日に亡くなっているし、1893年2月26日に女性歌手だった Hermine Spies が急逝している。1894年の2月6日には Theodor Billroth、2月12日には Hans von Bülow と立て続けに二人の親友が亡くなり、さらに4月13日には Philipp Spitta が亡くなっている。一方で Brahms の名声は頂点にあり、1893年の60歳の誕生日に際して大規模な祝典が企画されたが、Brahms はこれを辞退して Widmann や Hanslick 夫妻とイタリア旅行へ出かけている<sup>\*1</sup>。また、若い頃に渴望していた地位であるハンブルク市のフィルハーモニー協会音楽監督への就任依頼が1894年4月に届く。これらの体験は「枯淡の境地」と呼ばれる後期ピアノ曲集に反映されていると考えられている。それに対して、作品120はそれを突き抜けたシンプルさ、明るさが特徴的である。どちらのソナタも、Mozart や Mendelssohn を思わせる明快さ、そして洗練された作曲技法を備えている。主題展開に関しても、以前のような変奏の技法を駆使するよりも、比較的原型を留めたままの形でごくわずかな変更で絶妙なニュアンスを出す方向へと舵を切っている。これらの傾向は1996年の4つの厳粛な歌 op.121 でさらに推し進められることになる。

### 1.2 初演

Brahms は8月26日付の手紙で Mühlfeld をイシュルへ招待し、30日付の手紙でその理由を明かしている [4]。「私はあなたのためにクラリネット協奏曲を作るほど無謀ではありません！ すべてが上手くいけば、ピアノ伴奏による控えめなソナタが二つ出来上がりそうです。」結局 Mühlfeld とは9月にベルヒテスガーデンで合流し、1894年9月23日にマイニンゲン公爵らの立ち合いのもと、Brahms は Mühlfeld とこの2曲のソナタを試演している [2]。続いて11月にはフランクフルトで Clara Schumann、Joseph Joachim の前でも演奏するなど、私的な演奏を重ねてこの曲を改訂している [4]。その際に、Clara 宅での演奏に Joachim を招待する10月14日付の手紙において Joachim にヴィオラ譜も準備できていると伝えているので、その時点までにヴィオラ版も作成されていると考えられる [4]。公

<sup>\*1</sup> 回想録集第3巻 p.140-145 に記述あり。

開初演はウィーンの Bösendorfersaal にて, Rosé 四重奏団のコンサートと併せて, 第2番が1895年1月8日, 第1番が1月11日に行われた<sup>\*2</sup>[1][4]. 恒例の演奏旅行がその後に続き, 3月までにベルリン, ライプツィヒ, フランクフルト, メルゼブルク, マイニンゲンで演奏している [2].

このふたつのソナタは概して好評で, 例えば1月27日のライプツィヒ公演について *Musikalisches Wochenblatt* 紙は好意的に伝えている. また, Eduard Hanslick はウィーンでの初演を聴いて次のように評している [4]. 「変ホ長調のソナタの第1楽章はとても喜ばしいものだった. テーマは天国から舞い降りてきたものか, もしくは最も美しい若き日々から漂い出てきたもののようだ. 甘美な恋, そして愛の恍惚とした喜びに満たされている! 序なしにクラリネットが語るこのメロディー, その歌に酔わされるから, 私はこの楽章が最良に思え, へ短調のものよりも変ホ長調のソナタを評価したい」(Neue Freie Presse, 15 Jan 1895)

### 1.3 出版

2月26日にマイニンゲンでこのソナタを演奏した後, Brahms は Simrock に楽譜を送り, 出版に向けた作業を開始している. 校正作業は3月中に完了し, 最終的に Brahms は校正済みヴィオラ譜を4月1日付で Simrock に送付している [4]. 出版は1895年6月中旬で, 同時に Brahms 自身によるヴィオラ譜も出版されている. 出版のための作業は4月上旬には終わっていたが, 実際に発行されるまでに時間を設けることで Mühlfeld の独占的な演奏を確保しているのである [4]. Brahms は同年夏にさらにピアノパートにも手を加えたヴァイオリンとピアノのための編曲版も出版している [5].

主要な出版譜は以下の通り.

- Simrock 社, 1895 年 (クラリネット版 Plate 10408-09, ヴィオラ版 Plate 104010-11, ヴァイオリン版 Plate 104033-34)
- Breitkopf & Härtel 社, 1926-27 年, Hans Gál 編 (Plate J.B. 41-42, 新装版 EB 6915-18)
- Universal Edition, Hans-Christian Müller 編 [ウィーン原典版] (UT50015-16)
- Henle 社, 1974 年, Monica Steegmann 編 (クラリネット版 HN274, ヴィオラ版 HN231)
- Henle 社, 2013 年, Johannes Behr & Egon Voss 編 (クラリネット版 HN987, ヴィオラ版 HN988)

また, 第1番に関しては Luciano Berio による管弦楽伴奏版 (UE18868, 1986 年), 第2番は Rainer Schottstädt による管弦楽伴奏版 (GS 20 015, 1951 年) がある.

自筆譜はニューヨークのモルガン・ライブラリーに所蔵されている. また William Kupfer による筆写譜は Staats- und Universitätsbibliothek Hamburg にある. Brahms 自身が所有していた彼による書き込み付き Simrock 初版譜は, 第2番のみウィーン楽友協会が収蔵している.

<sup>\*2</sup> そのリハーサルに関する記述が回想録集第2巻 p.123 にある.

## 第2章

# クラリネットソナタ第1番

### 2.1 全体の構造

### 2.2 第1楽章

### 2.3 第2楽章

### 2.4 第3楽章

### 2.5 第4楽章

## 第3章

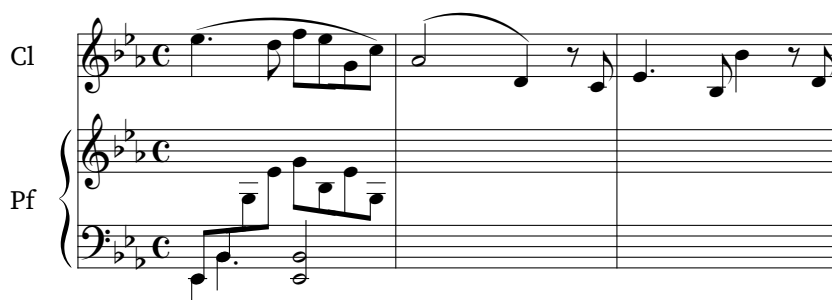
# クラリネットソナタ第2番

### 3.1 第1楽章: Allegro amabile

提示部 E			展開部 D			再現部 R			コーダ C
1-55			56-102			103-149			150-173
E <sub>1</sub>	E <sub>2</sub>	E <sub>c</sub>	D <sub>1</sub>	D <sub>2</sub>	D <sub>3</sub>	R <sub>1</sub>	R <sub>2</sub>	R <sub>c</sub>	
1-	22-	40-	56-	73-	88-	103-	120-	138-	
Es	B	B	Es-g	G	B	Es	Es	Es	E-Es

表 1: 第1楽章の構成

典型的なソナタ形式の楽章だが, Brahms のどのソナタ楽章と比較しても形式的明瞭さが顕著である. 変ホ長調, 4分の4拍子.



譜例 1: 第2番第1楽章冒頭. クラリネットはB管だがここでは実音表記.

序をおかずクラリネットによる第1主題の提示から始まる (譜例 1).



譜例 2: 第2番第1楽章第22小節から.



譜例 3: 第 2 番第 1 楽章第 40 小節から.

## 3.2 第2楽章

## 3.3 第3楽章

## 参考文献

- [1] 「作曲家別名曲解説ライブラリー ブラームス」音楽之友社 (1993)
- [2] 西原 稔 「作曲家人と作品シリーズ ブラームス」音楽之友社 (2006)
- [3] 「ブラームス回想録集」全三巻, 音楽之友社 (2004)
- [4] 楽譜 G. Henle Verlag 版 (HN274, HN988)
- [5] IMSLP (第 1 番, 第 2 番)
- [6] ブラームス: ヴィオラ・ソナタ集 (今井信子／ヴィグノールス) (Chandos, 1987) CHAN8550
- [7] Tyndall, Emily, "Johannes Brahms & Richard Mühlfeld: Sonata in F Minor for Clarinet & Piano, Op. 120 No. 1" (2010). Theses and Dissertations. Paper 141. (Music Performance Commons, [archive.org](https://archive.org))